連載

遠距離介護から見えてくる子ごころ親ごころ

――パオッコ活動現場より⑱

NPO法人パオッコ　～離れて暮らす親のケアを考える会～　太田差惠子

パオッコでは、毎年秋に「遠距離介護セミナー」を開催しています。住友生命社会福祉事業団との共催事業です。

今年は11月6日に東京、20日に大阪で開催しました。

毎回、テーマに悩みます。なぜなら、遠距離介護の「お悩み」はあまりに多様性があるから。参加くださる方々の「知りたい」ニーズは実にさまざまです。

振り返ってみると、昨年は「どうする!?どうなる!?離れて暮らす親の介護」。これから、という方のために遠距離介護〝準備〟セミナーとしました。

２００９年は「親のこころを元気にしたい！」。多くの子世代の一番の願いかもしれません。

この年は、葉っぱビジネスで有名な「いろどり」の横石知二氏に特別講演をお願いしました。おばあちゃんたちに、あれほどの笑顔になってもらえる秘訣をお聞きしたかったのです。演題は「大事なことは、輝く場面をつくることです」でした。

２００８年は「働きながら故郷の親を介護する」。老いた親が遠方に暮らしている場合、子世代は実家への「転居」を考えることも多いのですが、そうすれば仕事は？　という問題に直面します。

２００７年は「親の認知症やうつが気になるあなたへ『別居の子』にもできることとは？」でした。離れて暮らす親の認知症やうつを心配する子世代も大勢います。

前置きが長くなりました。

今年のタイトルは、「今日から役立つ知恵とコツ。離れて暮らす親の介護」。

東京での1部は、樋口恵子氏の「遠距離介護のこれから―大介護社会の家族と介護―」という基調講演。後半の2部はパオッコ恒例の「お悩み軽減！アドバイストーク」です。現場の専門家に登壇いただき、会場全体で問題を共有し、助言をいただきます。同時に専門家の先生に離れて暮らす子世代の生の「声」を知ってもらおうという意図もあります。今回のテーマは「親を支える介護と医療」です。

東京会場には日本プライマリ・ケア連合会の理事長で医師の前沢政次氏、そして社会福祉士・介護福祉士・ケアマネジャー経験が長く、現在は長野県を中心に各種介護事業所を運営されている岩澤純氏、さらに基調講演に続き樋口氏も登壇くださいました。コーディネーターはパオッコ顧問の関孝敏氏（北海道大学名誉教授）です。

医療保険と介護保険が別物であることなどは、専門家の方々には「当たり前」のことなのだと思います。

ですが、一般の方には「当たり前」ではなく、「意味不明」の世界です。「別物です」と言われても、茫然としたり、苛立ちを覚えたりすることが常。その場で、誰かにきちんと説明してもらいたいと思うのは当然です。

老親の多くは何らかの病気やけがで病院にかかり、そして急性期を乗り越え、「介護期」に移行します。一人の人間に起こる出来事ですし、そこにしっかりとしたラインがあるわけはありません。そんな状況になった親を、子は見守り、看病し、介助し、介護することとなります。初めての経験であることも多く、困惑します。

今年、パオッコの掲示板にこんな投稿があったことが、とても気になっていました。タイトルは「介護制度と医療制度のはざまで」です。引用します。

「今回の施設への入所（離れて暮らす母親）では色々と考えさせられる事がありました。ケアマネジャーは介護制度の範囲内ではやってくれますが、医療面ではどうしても知識が十分でないところがあるので及び腰となっていました。私もあとで調べてみましたが、入院後の症状により在宅、転院、施設への入所に別れていきます。このような具体的な説明を病院が行うのか担当のケアマネジャーが行うのか明確になっていません。病院にも医療ソーシャルワーカー（ＭＳＷ）がいますが、ケアマネジャーとは異なり、公式な資格ではないため病院のなかには看護師や事務員などの方がやっているところも。ソーシャルワーカーということで社会福祉士がやっていることが多いです。しかし業務範囲は統一されておらず、単に相談業務や転院・退院業務のところも多いようです。今回はたまたま介護施設を何とか紹介していただけましたが、もしなかったらどうなっていたか考えるとぞっとします」

このご投稿を受ける形で、他の方が投稿されました。

「私もこの狭間でフリーズしました。素人にはよく判らない境界線です。『保険制度が違う』と一口に説明されても、どちらに何が出来て何が足りないのか、基礎知識がないと全く会話が成立しません。しかも田舎になればなるほどいい加減な仕事ぶりで、こちらが聞かないと余計な事は教えてくれません。後で私が検索なりして得た知識をぶつけて初めて代案を提示するお粗末ぶりです。

気が抜けません。信頼できません。安心できません。名称の違いもよく解かりません。

ケアマネジャー、ソーシャルワーカー、ケースワーカー、相談員、其々どこまでが範疇か判りません。相談すると『それは介護保険になるのでここではちょっと…』的な回答です」

そうなのです。これまでこういった声をたくさん聞いてきました。どちらの投稿の方かは分かりませんが、東京の遠距離介護セミナー会場に参加してくださっており、手をあげ、補足発言。「ちゃんと説明しないのに、病院から『3か月で出て行ってください』といわれました」と。

専門家からは以下のような声がありました。「国の制度に問題があります」。「ケアマネジャーが施設を紹介しても、報酬を得られない現実があります」

そうなのですよね、制度の問題なのでしょう。でも「医療と介護は重なり合うところが多いので、橋渡しのできる役割を誰かが担うことが必要」というご発言に納得。

ほかにも、さまざまな声が出ました。

「認知症の親を病院に連れていく方法は？　嫌がるんです」

「自治体によって、介護への取り組み方にばらつきがあるのはなぜ？」

どの声・疑問にも「正解」はないのですが、多くの方が通る道。さまざまな立場の方が問題を共有する機会となりました。と同時に、家族と医療や介護の専門職がしっかり話し合い、信頼関係を築くことの重要性を強く感じました。

NPO法人パオッコ
～離れて暮らす親のケアを考える会～

親世代はできることなら生涯、住み慣れた家で住まい続けたいと望み、子世代も仕事や子どもの教育などを考えると、故郷に戻ることは容易ではありません。そんな状況のなか、親の心身に衰えが生じると子世代はどうしたものかと悩みます。

パオッコは「ひとりの経験はきっとみんなの役に立つ」という理念のもと、情報や体験を共有。ぜひ、ホームページに遊びにきてください！

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-37-8
本郷春木町ビル9F インキュベーションハウス内
ホームページ　http://paokko.org